

「陵南小学校の玉利の棒踊り伝承活動の取組」

1 学校名

霧島市立陵南小学校

2 学年・人数

小学5・6年生 （計99人）

3 場所・日時

(1) 練習の場所・日時

陵南小学校体育館（7月～9月中旬）、運動会前の体育学習・総合的な学習の時間

(2) 発表の場所・日時

陵南小学校秋季大運動会（9月下旬）

4 伝承・活用に取り組んでいる郷土芸能、伝統行事や史跡について

(1) 名称

玉利の棒踊り（たまりのぼうおどり）

(2) 由来

「玉利の棒踊り」は、明治時代ごろから「五穀豊穡」と牛や馬の「病気退治」を願い、神社に奉納しながら踊ってきた伝統芸能である。この棒踊りでは、他の地方や地域で一般的に使用されている「6尺棒」ではなく、「ナタ」と「カマ」を使用して踊る。踊りは勇ましく躍動的で「ナタ」と「カマ」を「カチッ」と打ち合い、火花を散らし、「踊る人」・「見る人」の意気込みを高め、心を和ませてくれるのが特徴である。

(3) 構成等

まず2列縦隊で並んだ「ナタ」の列と「カマ」の列が、歌者の節回しに合わせて正面を向いて踊り始める。その後、節が進むにつれて「ナタ」と「カマ」が向かい合い「ナタ」と「カマ」をぶつけ合いながら踊る。そして、後半部分では、前後左右の四人組にもなり、動きがどんどん勇壮になっていく。運動会では入退場や場所移動に和太鼓の「ドンドン・ドンドン…」という響きを取り入れている。

5 保存会や地域との連携の具体

「玉利の棒踊り」は、昭和30年以前は毎年のように近辺の神社や「田の神様」に奉納されていたが、踊り手が徐々に減り、いつのまにか廃れてしまった。昭和42年に一度復活したものの、最近まで40年以上、棒踊りは途絶えたままだった。これまでの経緯を踏まえ、平成20年5月に会員25人（55歳～80歳）で「玉利棒踊り保存会」を発足し、長年途絶えていた棒踊りを40年ぶりに復活させた。

また、保存会では棒踊りの保存・伝承活動のために、年3回の奉納や披露などを

計画している。毎年12月上旬には、年間行事の1つである地区内の「田の神様」へ、五穀豊穡の感謝と祈願を込め棒踊りを奉納している。この奉納では、昔ながらの「かしわ刺身」、「かしわずし」、「煮しめ」などのお供え物が料理され、奉納後にはこのお供え物で懇親会を開催し、会員相互の和や伝承活動への意欲が一層高められている。このような中、平成24年の陵南小学校運動会で、5・6年生全員で「玉利の棒踊り」を地域伝統芸能の表現として、踊り始めたことで、伝承活動に明るい兆しが見えてきている。

6 文化財伝承・活用の取組の工夫した点

学校と地域が連携協力しながら棒踊りを継承していくために、7月には初めて棒踊りを踊る5年生に対して、保存会の方や6年生から間近に「棒踊り」を見せてもらい、全体的な流れと「棒踊り」への意欲を高めている。その後、9月に入ると総合的な学習の時間や体育の授業として、5・6年合同で「棒踊り」の練習に取り組んでいる。「ナタ」として踊るか、「カマ」として踊るかについては、本人の希望を大切にしながら、それぞれの所作に合った方で踊るようにしている。保存会の皆さんに輪番で学校での練習(週1回程度)を観てもらい、踊りの技術向上を図っている。

5・6年生100人前後(4列縦隊)で踊るので、浴衣や法被は持ち合わせてないが、体育服にお揃いのハチマキ・タスキ、そして腰紐を巻いて踊る。地域からの浄財で人数分のナタとカマを特注で作っていただき、また紐類もそろえた。平成25年からは踊り手だけでなく、祖父から孫への「歌者の伝承」として、祖父・孫での歌披露にも取り組んできている。

7 取組の様子(練習状況、発表の場等)



【体育館での練習風景】



【秋季大運動会での発表風景】



【祖父と孫による歌披露】

8 教職員の感想・意見

地域伝統芸能である「玉利の棒踊り」を5・6年生全員で練習し、運動会本番で保護者や地域の方々に披露することが、子どもたちにとって大変貴重な経験となっている。玉利棒踊り保存会の方々に御指導いただくことで、細かい動きや声の出し方を理解することができ、また、自信をもって披露することができる。今後は、運動会だけでなく、玉利棒踊り保存会の方々が玉利で行っている田の神様奉納に、子どもたちも参加することを検討していきたい。

将来、地元を離れて生活する子どももいると思われる。地元を思い出すときに、この「玉利の棒踊り」も思い出して欲しいという願いとともに、今後も継続して指導していければと考えている。

